

ケアとその意味, 特にケアの関係性や双方向性について

姫路大学特任教授 郷間 英世

「ケア」ということばは、本誌への投稿文の題名にもいくつか見られ、看護や福祉領域では大切な意味と内容を含んでいる。他の領域でも、乳幼児や愛玩動物の世話、さらに、口腔の健康保持や髪や肌の手入れまでその使用範囲はとても広く多様である。

歴史的には「子どものケア child care」からはじまり、「高齢者介護」や「病人の介護」「障害者介護」、そして「心のケア」のように広がってきている。

社会学者の上野は、著「ケアの社会学」でDailyの定義をもとに「依存的な存在である成人または子どもの身体的かつ情緒的な要求を、それが担われ、遂行される規範的・経済的・社会的枠組みのもとにおいて満たすことにかかわる行為と関係」と説明している。そこでは、「与え手」である専門家がケアを提供し、「受け手」である患者や利用者はケアを享受する。しかしそこでは、「行為」のみでなく「関係」ということば加えることで、ケアを与える者と受ける者との社会的な相互作用 interaction であることが強調されている。

ケアには、代替可能なものと代替不可能なものという二つの側面を持っていることが指摘されている。代替可能とは「与え手」から「受け手」への一方向的な実践であり、トレーニングを受けた専門職により同じように行われる。もう一つの側面の代替不可能とは、「与え手」と「受け手」が場を共有するなかで、「受け手」から「教わる」関係性が現れる。そのようなケアを人類学者の浮ヶ谷は「双方向的ケア」と呼び、医療現場ではしばしばみられ、またピアサポートのような専門職でない人同士でも成り立つとしている。

私は多くの障害のある子どもや大人そしてその家族とかかわってきた。そして、彼らから多くのことを教えられ、それをエネルギーとして、医療や教育・福祉の分野での仕事を続けてくることができた。これまで、彼らから与えられる力や充足感は何だろうとずっと考えてきたのであるが、先に述べた上野の「ケアの関係性」や浮ヶ谷の「ケアの双方向性」に出会うことで、その疑問への納得のいく答えを見つけたように思える。

文献

- 1) 上野千鶴子 (2011), ケアの社会学 - 当事者主権の福祉社会へ, 太田出版
- 2) 浮ヶ谷幸代 (2009), ケアと共同性の人類学, 生活書院